

シナイ通信

第12号

平成20年3月31日

NPO法人 シナイモツゴ郷の会

TEL/FAX(0229-56-2150)

MAIL shinaimotsugo284@ybb.ne.jp

<http://www.geocities.jp/shinaimotsugo284/>

989-4102 宮城県大崎市鹿島台木間塚

字小谷地 504-1 鹿島台公民館内



注目されるシナイモツゴ郷の米認証制度

市民・農業者による生態系保全システムづくりに挑戦

2月23日に開催されたシナイモツゴ郷の会総会で平成20年度計画が承認されました。里親制度や外来魚対策を中心としたこれまでの事業に加え、シナイモツゴ郷の米認証制度の確立を目指すことになりました。これにより市民と農業者が一体となって取り組む持続可能な生態系保全システムづくりを目指します。さらに、成果を発信し全国の仲間と意見交換し提案するため、恒例のシンポジウムを立教大学池袋キャンパスで11月29日に開催する予定で準備を開始しました。

H20年度総会開催

シナイモツゴ郷の会総会が開催され新年度がスタートしました。総会ではH19年度事業報告と決算、H20年度事業計画と予算案が承認されました。2名の満期退任を受けて選出された新規理事を含め、安住理事長以下12名の理事が執行部として活動することになりました。引き続きよろしくお祈りします。

シナイモツゴ郷の米認証制度が始動

H20年度事業計画の新機軸はシナイモツゴ郷の米認証制度です。

この制度はH18年から検討され、様々な議論を繰り返しながら、H19年7月に要領が定められスタートしました。8月以来生息池周辺の農業者と意見交換しながら、認証制度のあり方について検討してきました。いよいよ今春から小規模ですが、シナイモツゴ郷の米の栽培が始まります。今から秋の収穫が楽しみです。

制度の目的はシナイモツゴ生息池の水で栽培した米をブランド化してシナイモツゴの保護に貢献する農家を支援することにあります。シナイモツゴ郷の米はシナイモツゴが育つ清流を使って減農

薬・減化学肥料で栽培された安全安心な環境保全米です。消費者はシナイモツゴ郷の米を購入して安全でおいしい米を賞味することで、シナイモツゴが生息するため池を守る農業者を支援し環境保全に貢



献することができます。

みなさま、米価暴落で危機的経営状態にある農業者を支援し、シナイモツゴなど外来動植物が生息している田園の豊かな自然を守るために、今秋、販売されるシナイモツゴ郷の米を是非ご賞味下さい。

今後、生産者や当会などによる販売促進委員会を結成し、今秋から販売予定です。詳細が決まりましたら当会HPなどで公表します。

H20 年度シンポジウムは東京開催予定

恒例の水辺の自然再生シンポジウムは H19 年 10 月 27 日に大崎市古川の誠真短期大学で開催され、多くの先進的な取り組みが紹介され、活発な論議が展開されました（詳細 p2 ）。この中で、シンポジウムの内容は全国的な課題であり、是非東京で開催して欲しいという要望が出されました。これを受けて、執行部は東京開催の予算を獲得するため、助成金の申請を行なってきましたが、経団連自然保護基金と大阪コミュニティファンドの助成が3月に採択され、開催が決定しました。シンポジウムでは参加者と共に水辺の自然再生の現状と課題を中心に考え、実現に向けた積極的な提言をしていきたいと考えています。

テーマ 在来魚復元による水辺の自然再生

期日 平成 20 年 11 月 29 日（土）

13 : 00-17 : 00

会場 立教大学池袋キャンパス

H20 年度助成事業が確定

H19 秋から H21 春までの活動資金として、日野自動車グリーンファンド、経団連自然保護基金、大阪コミュニティ財団の3つの助成事業が採択されまし

た。シナイモツゴ郷の米認証制度、里親制度、外来魚対策、東京開催のシンポジウムなどが事業の主な活動内容です。

大崎市長との懇談会

伊藤市長が1月16日（水）にシナイモツゴ郷の会を訪れ、親しく懇談しました。シナイモツゴ郷の米の構想にとっても興味を持たれ、種々アドバイスをいただきました。

また、かつての品井沼、少しでも現存すれば大崎市第3のラムサール条約指定地に申請したかったなど、新春にふさわしい話題で盛り上がり、予定時間を大幅にオーバーしてしまいました。お昼には郷の会が保存していたヒシの実でヒシご飯をいただきました。

H20 年度里親募集中

当会が委嘱するシナイモツゴ里親を募集中です。詳細は p9 をご覧ください。

郷の会パンフレットができました

待望の活動紹介パンフレットが完成しました。A4 版 8 ページに活動写真満載で、これを使えば当会の活動を全て説明できそうです。必要な方はご連絡下さい。

2007 年 10 月 27 日に大崎市古川で開催されたシンポジウム 長谷川 政智

「水辺の自然再生を目指す市民活動」に参加して

今回のシンポジウムは、「水辺の再生をめざす市民活動」—外来魚対策と在来魚復元—という題目で開催されました。私は、前回に続き 2 回目の参加です。今回の基調講演も前回同様に、近畿大学の細谷先生が講演されてとても興味深く聴講できました。特に、シーボルトの淡水魚類標本についての考察は、淡水魚の保護活動をしている人々には、原点となる重要な事ではと認識させられました。今回のシンポジウムは、「水辺の再生をめざす市民活動」というように、全国で希少な淡水魚の保護活動をされている団体の



水辺の自然再生をめざし、さまざまな議論がかわされたシンポジウム

最新の活動報告を聞けるとってもすばらしい機会でした。ニッポンバラタナゴ、ヒナモロコ、ウシモツゴやシナイモツゴ、ゼニタナゴというように希少な魚たちの保護活動の様子が伝わり、これからの活動に活かして行きたいと思いました。

また、この水辺に、今では絶対というほど関係があるブラックバスの駆除についても前回に引き続き講演がありました。ため池や沼などでは大きな成果を上げている反面、河川の取り組みが遅れているのが少し残念でなりません。また、新たに、ブルーギルという外来魚の問題も大きくなっていて対応策が急がれます。私も、伊豆沼のバスマスターズやため池の池干しに参加し、バスやブルーギル駆除をしています。1日も早く、昔のようなため池や沼になって小魚やエビ、水生昆虫が泳ぎ、子供たちが魚取りや、エビ、ヤゴなどが採れる事を夢見て楽しみにしながら

参加しています。

ため池に欠かせないのが、それを取り巻く環境、特に水田やその畦です。今回も、冬水たん

水辺の自然再生シンポジウム東京開催予定

—外来魚対策と在来魚の復元

2008年11月29日(土) 13:00~17:00

立教大学 池袋キャンパス

入場料 無料

ぼのその後や畦から遡上する小魚類の観察結果が発表されましたがとても興味深いものでした。次回の発表がとても楽しみです。

最後になりましたが、シンポジウムを主催された関係皆様、講演された講師の皆様とても貴重な時間をありがとうございました。次の機会を楽しみにお待ちしております。

先人が築いたものをしっかりと

受け継ぎ地域に根付く新商品を

DC鹿島台地域実行委員会

実行委員 多田 いさ子さん

鹿島台地域には互市と菱取り唄しかないなんて思ってたら、三年ほど前にシナイモツゴ郷の会主催のイベントがあり、鹿島台産の食材で作った料理をいただく機会がありました。菱ご飯や菱のチリソース煮、沼エビを使ったエビもち、ミズナにホウレン草、トマトなど、なんでもそろっていて、色とりどりのおいしそうな料理がテーブルいっぱいになりました。「なんだ、何も無いのではなく、何でもあるんだ！」ってそのとき初めて気付いたんです。

12月9日には鎌田記念ホールで「菱取り唄全国大会」が開催されました。さすがに全国大会というだけあって、県内外から約400人もの方が参加しました。



ヒシを育てる会が販売を始めた品井沼ヒシ

品井沼が干拓される以前は、沼一面に菱が生えていて、8月になると沼に多くの舟が出て菱を取って

いました。そのときに歌われていたのが「菱取り唄」なんです。

大会当日、会場に集まった人たちに試食として「菱ご飯」を出したところ、とても好評であったという間に品切れになりました。「菱なんて久しぶりだなあ。懐かしいなあ」と言ってくれる年配の人もいました。

鹿島台地域の菱は、歌にも歌われるほどの特産品なのだから試食だけで終わらせるのではなく、鹿島台地域でしか食べられない「菱ご飯弁当」として商品化したいと考えています。

DCの実行委員会には、観光協会、商工会、飲食店の人が入っていますので、この機会にみんなで協力して、DCが終わっても定着する鹿島台地域の名物に育てていきたいと思っています。

鹿島台地域の互市が東北随一と言われるまでに

生き物観察会 坂本 啓

平成19年9月2日（日）に大崎市鹿島台山谷地区でシナイモツゴ郷の会主催の生き物観察会が行われました。当日は山谷地区の皆さんと郷の会会員合わせて約20名が参加しました。胴長や長靴を履いた昔腕に覚えのある調査員が川に入り、三角網やたも網で魚を捕っていきます。参加人数が多かったのと魚が取れるたびに挙がる歓声が大きかったせいか、当初は参加する予定のなかった近所の方々も家から出てきて観察会を見に来てくださいました。また、調査地点の周辺では地区の子供たちが元気に走り回り、捕れた魚を見て目を輝かせる光景が見られました。

今回の広長川3地点の調査では11種の魚類が捕獲されました。山谷地区では7月と8月にも生き物調査が行われており、それらの結果



とあわせると16種の魚類が確認されています。この中にはシナイモツゴやスナヤツメなどの希少種も含まれており、豊かな自然がまだ残されていると思います。しかし、一方で外来魚であるオオクチバスも確認され、在来の生態系への影響が懸念されます。今後も定期的に調査を行っていくとともに外来魚対策も実施していく必要があります。郷の会ではこのような生き物観察会を今後とも実施していきたいと考えています。

なったのも鎌田三之助村長さんのおかげだと聞いています。DCで私たちの地域がやろうとしていることの多くが鎌田村長にゆかりのあるものだという事、とてもすごいことだとあらためて実感しました。

「先人が築いてきたものがたくさんあるのだから、後の人もしっかりと受け継いでいかなければいけない」と思っています。一番大切なのは、取り組むか取り組まないかなんですよね。

大崎市広報誌 「おおさき」No22, 2008年1月（多田さんと広報課の了解を得て転載しました）

好評品井沼ひしの購入先

品井沼ひしを育てる会からのお知らせ

販売店:すがい酒店(鹿島台福芦 0229-56-5746)

販売期間(予定) 9~12月 郵送可



「よみがえれ！小さな魚の郷～シナイモツゴ郷の会～」

取材を受けて 大條 瑞希

【事務局から】当会の活動が全国TV放送されました。東北放送が4～9月に当会の活動を密着取材し、10月22日から財団法人民間放送教育協会が27分番組として放映しました。取材を受けた会員は初めてのことで戸惑いながらの対応でしたが、放映内容は素晴らしい出来映えで、皆感動しました。撮影取材スタッフのみなさまご苦労様でした。関心のある方は録画DVDをお貸ししますので事務局までご連絡下さい。以下、個人の里親として取材を受けた大條さんのレポートを掲載します。

石井さんに、シナイモツゴのテレビ取材の話聞いた時は、驚きましたが楽しそうだったので、喜んで取材を受けることにしました。

夏休みに、カメラマンを含む3人の方と、郷の会飼育インストラクターの石井さんと大浦さんが私の家を訪れました。シナイモツゴの飼育方法などのアドバイスを、大浦さんと石井さんにしていただきました。いざ、カメラを向けられインタビューされたときは、すごく緊張し、上手に質問に答えられませんでした。その後、アドバイスに従い、水槽の底に黒い石を敷き詰め、水槽を入れシナイモツゴが落ち着いて、住めるように改善しました。

それから、数日後どのように、改善したか2度目



底の餌を食べる水槽飼育のシナイモツゴ

の取材を受けました。水槽の底に黒い石を敷いたので、シナイモツゴは改善前よりのびのびと泳いでいるように見えました。そして、水草を入れたので少し自然な環境で飼っているような感じになりました。初めは大きいエサを与えていましたが、シナイモツゴに合う小さなエサに代えたところ、上手に食べられるようになりました。

アドバイスのおかげで、シナイモツゴの環境に合う水槽を作ることが出来ました。今度は、水槽の中で産卵に成功したらまた、取材に来て欲しいと思います。

シナイモツゴの飼育で、とても貴重な体験ができた良い思い出になりました。ありがとうございました。



全国放送「夢キラリ」の撮影風景

去年(平成18年)は病気治療で淡水魚(モツゴ、メダカ、タナゴなど)の飼育準備が遅れたので、今年は4月早々に産卵用、飼育用にそれぞれガラス水槽やポリタル、コンテナ容器(灯油容器入れ)、甕などを用意しました。それからミジンコ繁殖用に各ポリタルへ小砂利や田土を入れた容器なども準備しました。

イ) 容器内の準備として、飼育用ガラス水槽には底辺に小砂利や海のマキガイ殻(俗称つぶ貝殻)、小石、藻などを配置し、予ねて液肥などで作っておいたグリーンウオターを加え、近くの雨水側溝のピットからケンミジンコをすくって入れて見ました。やがて5月に入り水温も上昇し順調に増えて飼育槽の準備が整いました。

それから別の産卵槽には前もって集材をいれておいたので、親モツゴやメダカの産卵のしぐさを見て栄養補給のために今回は鯉用の大粒固形餌、メダカにはフレークや固形餌を与え、時々ミジンコを与えて見ました。

これまでの飼育準備経過を見ると、初期の飼育水槽内の準備はうまく行き、予想以上にミジンコの繁殖が順調にきました。

ところで水換えのことになりますが、水槽飼育の中で最も真剣に考えて見る必要があります。何故なら水換え時機や節水、水温、水質変化などの関係で何時換えればよいのか、様々な試行錯誤を繰り返しながらも、水槽飼育では最も難しい課題であると感じました。

その時期は上記以外に水の透明度、エアレーションの強弱・・・濁り、緑、褐色などの色調、或いは前面ガラスに藻が付着して中が良く見えない場合などがあります。緑色や藻の繁茂は水質の富栄養化が進んでいるものと考え、早めに水換えをすべきであります。この時PH試験紙で測定すればさらに水質の程度が良く判ります。

ロ) 5月末になるとモツゴの産卵が始まり、産卵槽から一番飼育水槽に魚眼の見える鉢を二個ずつ移して、孵化の様子を観察していましたが、数百個の魚卵が確認されたにもかかわらず、魚影があまり見えないので、水質悪化で大方死滅したものと思いました。点検の為、水位を下げたところ沢山の稚魚を確認して、水槽掃除のために二番水槽に全量を移しました。今後は水質や生育状態を見ながら適宜処置しようと思いました。

二番水槽にはケンミジンコが、体長の大きい親ミジンコ(体長一ミリ超)が沢山繁殖遊泳しています。稚魚が最初に食するものは、モツゴに限らず他の稚魚類も親ミジンコが産卵し孵化したばかりの子ミジンコ(親ミジンコの数十分の一以下のおおきさ)のほかに微小な動植物プランクトンも摂食すると推測しています。この水槽は稚魚の過密と給餌の加減で水質悪化が進んでいると思われるので早めに水の交換をしました。稚魚の給水は汲み置き水を水槽よ

り高い所にポリタンクを置き、水流を加減しながら五ミリ径のパイプでサイホンの原理を利用して自然流下します。排水は稚魚が吸い込まれないように、また揉まれて魚体に傷がつかないように水流を見ながら、吸入口にガーゼの様なメッシュの細かいものをつけて静かに排水します。

やがて成長するにつれて泳ぎも力強くなるので、吸い口には徐々に目の粗いものを用いていきますが、同時に増加してきた余剰汚泥なども出来るだけ吸い上げるようにします。この余剰汚泥はバクテリアなどで有機物が分解吸収された残りの無機化された成分が多いので、生物には最早や不用の産物です。水槽の底辺生物を活性化するためにも必要な除去作業でもあります。

ハ) いよいよ稚魚が大きくなると微生物の摂食だけでは不足してくるので、出来るだけ早く市販の細かい稚魚用の人工餌を与えるようにしました。しかし産卵孵化後の稚魚の生存率が極めて少ないのは、恐らく餌となる動植物プランクトンの絶対量が不足するものと考えています。

これは水槽飼育における難問の一つと考えていましたので、時々、近くの水田にミジンコ採集に行きます。種類を調べてみると、カイミジンコ、ケンミジンコ、ダフニヤ?などがおるようです。増殖しようと思って既に水作りしておいた容器に入れ、エアレーションしながらグリーンウオターを与えますが、飼育が難しく突然いなくなる場合もあります。たまには水槽内で盛んに増殖している時もあるのですが、水質環境変化などで微妙に反応するのか、突然見えなくなります。今後の興味ある研究課題のようです。

そこで採集したミジンコを飼育水槽に入れて、グリーンウオターを少しずつ加えながら孵化後の稚魚にミジンコ水を与えますが、親ミジンコは稚魚には大きくて食べられず、子ミジンコを稚魚が食べている内に親は寿命で消滅すると思われれます。

それでもミジンコが少ない時は水作り(グリーンウオター)をしますが、時にはアオミドロが繁茂する場合があります。稚魚が人工餌を食するまでグリーンウオターを欠かさず、水質を見ながら慎重に飼育管理する必要があります。

ここで水中の生物を検鏡で覗くとアオミドロの周辺には数種の微生物が見られ、グリーンウオターには稚魚の好きなワムシ類など種々の微生物が確認できました。

親魚の産卵と孵化期間が長くなるにつれ、成長に差が出てくるので、水換えしながら大小選別して別の水槽に移します。これは大きさの違いがあると索餌能力にも差ができ、さらに成長に大小が目立つようになります。

ニ) 梅雨に入り、今年の前半は空梅雨、中盤は本格的な雨空が続きました。

モツゴやメダカの産卵もそろそろ終盤に入ったのかなと思われれます。タナゴはこれから産卵孵化の時期になる筈です。

ポツリポツリ孵化してきますが例年より遅れているようです。最初に孵化した稚魚も大分大きくなり人工餌を与えています。同時にグリーンウォーターも給水します。この水にはコケ類の他によく見るとミジンコの様な生物が動いています。

ホ) 稚魚が成長するにつれ水の汚れも目立つようになりますが、水換えの間隔も短く、その時期を見極めることは大変難しく、時には全滅させたこともありました。

節水と水換え時期を判断することは今後も様々な経験をしながら研究しなければならぬといつも考えています。透明度や試験紙、薬品などの他に水を直接口に含み舌の味わいで感じることもあります。この時は酸っぱい感じがしました。

ここで水換えの色々な工夫を私なりに紹介して見ます。

水槽からの排水には家庭用の石油ポンプの吸入口をペットボトルの肩口と網戸のネットで被せて使いますが、稚魚の時は吸い



ズラリと並ぶ著書の水槽

込みが強いのでガーゼなどを被せるか、孵化間もない稚魚にはさらに細い（内径5～10ミリ）ビニールホースに、これもガーゼを使った吸入口からサイホンを使い自然流下します。

給水には水道水の1日以上汲み置き水、または温度差がある場合（冬期）は給温水も混ぜて使います。小型ポンプのホース出口に散水用のシャワーノズルや手拭などを使いますが、時には給水面より高い所にポリタンクを置き、細いビニールホースで静かに給水します。

水換えで考えねばならない事があります。それは急激な温度差は勿論の事、前後の水質の急激な変化であります。PH値、各種水溶性ミネラル、微小動物植物プランクトンの存在の有無など水質環境の著しい変化は魚類に悪影響を与え、または死滅することもあります。水換え量はその時の状況で異なりますが、およそ1/2~1/3量、全量換えた場合は水質を改善するため少しグリーンウォーターを加えます。いずれにしても節水と水換え期間の長短及び水質の最適条件を合わせて考えなければなりません。

へ) 稚魚が成長するにつれ又は産卵孵化時期の差で体長にも大きさの違いがはっきりしてきます。当然その後も体長の大きさばかりでなく、索餌の優劣差で益々成長に大きな開きがでてきます。そこで水槽ごとに大きさを選別して成長の均一化をします。特に孵化が継続している場合は面倒でもこの選別作業が必要です。

ト) それから水質改善や水棲環境を整えるのに藻や水生植物、植物プランクトンの存在は不可欠です。

これらは光合成酸素供給や魚類の餌にもなり、さらに魚類の憩いの場所を作り又魚類の排泄物や残り餌の分解産物である窒素成分やその他を吸収し水質の改善をしてくれます。

実際に私はアオミドロを石や貝殻、木炭に着生させ、また浮き草や発根水生植物などを用いて諸条件を満たすようにしています。あまり繁茂するようであれば摘み取ります。

春から秋までは屋外の水槽にはホテイアオイ、オオフサモ、オモダカやその他の水草をいれますが、冬は葉が枯れてしまいます。

冬期の屋内水槽では日光や電燈でアオミドロが良く育ってくれています。それに沼エビやタヌシ、カワニナが残り餌の後始末をしてくれます。

チ) 冬期の餌さやりは屋外ではたまにあげるくらいですが、屋内では加温の有無によって給餌回数の頻度はことなります。加温は20℃位で、今冬はメダカの稚魚の飼育に用い、少し多めに餌さをやり、他は水温が10℃前後なので給餌加減します。給餌は鯉用中粒を2×3ミリ目のネットに入れて巻き込みながら、1ミリ径の銅線で吊り下げて餌の残存を確かめて出来るだけ水槽水の汚濁を少なくしています。

ここで冬季水替えの時機になりますが、屋外では晩秋から春まで1～2回程度とします。屋内では水温や給餌の回数にもよりますが、水温の高い（加温20℃前後）であれば、月に1回位、それ以下であれば2ヶ月に1回程度を目安にしています。水質の汚濁度やPH値によっては適宜水換え間隔を調整しています。水換えの水温の調整は水槽水温と同程度になるように、水槽近くに同量程度を汲み置きするか、または加温水であれば給湯水を水道水で所定温度を確かめながら調整します。（ここで給湯、給水の量や温度の計算式があります）

以上のとおり冬期でも屋内外の水質管理をしています。屋外の水槽ではエアレーションとビニール紙やガラスで保温しています。オオフサモも枯れず、今冬、2月現在まで氷が張らないで経過しています。ちなみに屋内ではメダカ類、屋外にはモツゴやタナゴを飼っています。

終わりになりますが、淡水魚の水槽での産卵孵化と飼育は屋内外の設置場所を問わず種々の問題点があり、解決には今後とも工夫と研究が必要と感じています。

これからもシナイモツゴ郷の会の皆様と共に情報交換と交流をはかりながら、尚一層の努力に励みたいと思います。

楽しさてんこ盛り

石井洋子

—大崎市鹿島台文化祭（11月3～4日）—

恒例の鹿島台文化祭がやってきました。出展5回目となり、鎌田記念館アリーナの東の角の定位置で、郷の会のブースは今年も賑やかです。

まず、目に飛び込んでくるのが、水槽の並んだ生き物コーナー。秘蔵のシナイモツゴはもちろん、この辺の川やため池に棲むタイリクバラタナゴやメダカ、子供に人気のアメリカザリガニ、ごろんとしたドブガイなどに、昔子どもだった人々が足を止めます。外来生物に法の網が掛けられたため、オオクチバスを展示できないことは残念と言えなくもありません。

人々の足は、活動を紹介したパネルを見ながら、空中に浮かぶ謎の鉢の間をくぐる訳ですが、聞かれさえすれば（聞かれなくても）スタッフは喜々として、これはシナイモツゴが卵を産みたくなる魔法の仕掛けだ、と話してくれる筈です。鉢の周りにちゃんとダミーのシナイモツゴがおよいでいたでしょう？



人気の「品井沼の魚コーナー」

今年で3年目となったヒシ栽培のコーナーでは、試食のヒシの実で、ひとしきり昔話の花が咲きます。白いヒシの花は清楚ですね。まるで私のように・・・。

気を取り直して更に進むと、「いきいき夢きらり」の上映です。1日6回も写すので、前を通るたび、画面の中でペラペラしゃべっているおばさんにぎょっとして、11月なのに背中に汗が・・・・（何せ実名と年齢が字幕に出るのよ！）。

ここを何とかクリアすると、手ざわりも易しい色とりどりのシナイモツゴが迎えてくれます。30色のフェルトを自在に使ったオリジナルのマスコットたちは、左右の体色、鰭の色がひとつとして同じ組み合わせはありません。あなたのお好きなシナイモツゴをあなたのお部屋に、とお勧めして、脇

で大きな口を開けているペットボトルの募金箱へと誘う、まるで蟻地獄の如きシステムに、快くご協力下さったみな様に心から感謝します。

こうして見てきてあとから思ったのは、今年から本格的に取り組んでいる、シナイモツゴ郷の米認証制度についての説明があれば良かった、ということです。時間があれば、展示内容について煮詰めることも大事ではと思いました。とは言え、短時間の準備での、ここに紹介しきれない程の盛りだくさんの展示は、日頃の団結の賜であることは間違いないようです。

団体（企業）会員募集

だれででもできる自然再生技術開発と体制づくりへ参加しませんか？

○特典：最新情報の提供、共同研究・調査への参加

○資格：賛助会員もしくは正会員

○年会費：1口 10,000円

平成20年度のシナイモツゴ里親活動

二宮景喜

いよいよ春本番。里親活動を再開する時期となりました。私の家でも、シナイモツゴが3つの水槽で餌を求めて活発に泳ぎまわっています。

学校の池で子供たちが1年間育てたシナイモツゴを預かり、新しい生息池に放流するまでの間、郷の会の担当者が手分けして公民館や個人宅で飼育しています。公共施設での展示や学校・個人からの飼育の希望が常にあり、それにも応える必要があります。子供たちの思いを無にしないためにも注意して飼育していますが、思わぬ油断から死なせてしまうこともあり、なかなか気苦労の多い仕事です。

「だれでもできる人工繁殖技術」を確立してから今年で6年目になり、シナイモツゴの増殖に小学校の里親は非常に大きな役割を果たしていますが、昨年は卵から育てる里親校（A会員）に仙台市立松陵小学校と鶴谷小学校が加わり合計5校に増えました。秋に行った生育調査では、順調に育っているところが多く、この春の成果を楽しみにしています。一方、卵を入れるタイミングの遅れや夏場の猛暑などで、生育状況が心配なところもあります。これは今年にむけての大きな反省事項となります。

小学校での里親活動は子供たちが自然や環境を考える場としても機能しています。昨年は鹿島台小学校や小野小学校で子供たちの研究発表会が催され、郷の会のメンバーも招待され、熱心な発表に感動してきました。「損保ジャパンちきゅうくらぶ」から助成金をいただき、それをもとに小学生向けのパンフレットを現在作成中ですが、これからの学習に役立ててもらおうと考えています。環境教育の面でも小学校との協力をさらに強めていきたいと思えます。

小学校の池での繁殖の作業は4月下旬の稚魚の回収と池の掃除から始まります。各学校と日程を調整しながら、子供たちと郷の会のメンバーが協力してやっていきます。もしお手伝いをいただける方がおられましたら、どなたでもご参加ください。郷の会にご連絡いただければ、日程などわかり次第お知らせします。

特に、鹿島台小学校は校舎の耐震補強工事のために、工事の合間を縫って、作業を短時間でやらなければならないようです。そのため多くの人手が必要となりますので、ぜひご協力ください。学校の都合がよければ、4月20日ごろまでに池の掃除を終わらせたいと考えているところです。

最終目標である生息池を拡大するために、今年もまたシナイモツゴの生息に適した溜池の



シナイモツゴの人工繁殖に取り組む里親小学校

所有者で放流と飼育に協力していただける里親（C会員）を募集しますので、個人あるいは団体で心当たりがありましたら、ぜひご紹介ください。また、個人で飼育する里親（B会員）は、春と秋に若干名募集しますので、ご希望の方は事務局までご連絡ください。

今年も、里親活動へのご協力をよろしくお願いいたします。

シナイモツゴBCC通信から（No107：10月19日配信）

みなさま

三陸ではサンマとモドリガツオが話題になっています。今年のカツオはひときわ脂がのっておいしいそうです。

興味のある方は人気の「魚ログ(岩手産地市場ブログ)」をご覧ください。

イベント情報

①「水辺の自然再生シンポジウム」が近づいてきました。

講演要旨の印刷が始まりました。新鮮、画期的な話題でもりあがりそうで、とても楽しみです。講師のみな様よろしくお祈りします。

基調講演 近畿大細谷教授：シーボルトが江戸時代に作製した魚類標本をオランダで調査し、日本の原風景を語る。

外来魚対策 ノーバスネット小林氏と伊豆沼・内沼環境保全財団の進東氏： 全国の最新情報

話題提供

- 1) 鶴岡淡水魚夢童の会の岡部氏：赤川再生にむけた提言
- 2) ニッポンバラタナゴ高安研究会の山野・加納氏：池干しがドブガイの繁殖に与える影響
- 3) ヒナモロコ里親会の大石氏：着実に成果をあげる里親活動
- 4) 岐阜県河川環境研究所の大原氏：ウシモツゴ保護の官民協働
- 5) 伊豆沼・内沼環境保全財団の藤本氏：ゼニタナゴの生態と保護方策
- 6) 宮城内水面水産試験場 坂本氏：メダカはヒューム管で越冬するという画期的な発見
- 7) シナイモツゴ郷の会 高橋氏：シナイモツゴ生息池の環境保全に取り組む農業者を支援するシナイモツゴ郷の米認証制度

●午後にはナマズのがっこうから水田魚道を中心とした水田の自然再生について貴重な報告があります。

シナイモツゴ BCC 通信

会員と賛助会員向けに月3回程度メール配信しています。配信希望の方はご連絡ください。

***さらに、シナイモツゴ郷の会と伊豆沼内沼環境保全財団が共同開発の新型人工産卵床の実物をお披露目します。

***公表のヒシご飯弁当(お茶付き 800 円、要予約)を用意しています。

開催期日 10月27日(土) 9:30

開催場所 大崎市古川 誠真短期大学

主催 NPO 法人シナイモツゴ郷の会、ナマズのがっこう、(社)農村環境整備センター、全国ブラックバス防除ネットワーク

後援 大崎市、JA みどりの

***詳細は HP か BCC 通信 104 の添付ファイルをご覧ください。

***当日参加も OK です。

②いきいき夢キラリ の放送日が近づいています。

郷の会で活動しているみんなが出演します。

是非、ご覧ください。

宮城県の放送は 東北放送 10月22日午前10時50分から11時20分

放送日は地域により異なりますので BCC 通信 105 添付の放送予定をご覧ください。

成果情報

①定例会・理事会

10月14日(日) 18:00から鹿島台公民館で開催し、シンポジウムの準備について話し合いました。

②助成金

日野自動車グリーンファンド H19 年度の助成が決定

シナイはアイヌ語で大きな川(沢)を意味します。小さな流れが大きな川になるように地道な活動を続けていきましょう。